

令和4年度 第3回甲賀市文化のまちづくり審議会 議事録

日時 令和4年(2022年)10月11日(火)
18:00~20:00

場所 あいこうか市民ホール練習室3

出席者 委員 今西委員、梅本委員、福井委員、清水委員、大野委員、河尻委員
早川委員、山下委員
以上8名
事務局 教育委員会事務局 山本部長、田村次長
社会教育スポーツ課 三日月課長、岡崎参事
上村課長補佐 藤田主査

傍聴者 1名

審議会委員12名のうち、出席委員が8名であることから、甲賀市文化のまちづくり審議会規則第3条第2項の規定により、会議が成立していることを事務局から報告。

1. 開会

大野会長 あいさつ

2. 協議事項

大野会長により議事進行

(1) 文化芸術に関する条例の制定に向けて 意見交換

大澤寅雄氏(株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員)をお迎えして

① 事務局から、「文化芸術に関する条例の制定に向けて<経過>」の説明

② 大澤氏から提言

昨年の「文化のまちづくりフォーラム」のときは、オンラインでお話した。その前年には、神戸大学の藤野先生(現在、芸術文化観光専門職大学副学長)が来られて、お話されていた。

条例とか法律とかを語ると、政策用語、行政用語とか固くなる。楽しかったり、うれしかったり、喜びをわかちあい共有することは大事で、どういう風にすれば確認しあえるのかが、こういう条例である場合忘れないようにしたい。

わたし自身、みなさんと同じように委員という立ち位置で条例づくりの場で意見を求められたりすることがある。そういう場に招かれない市民に届けることを何回かやったことがある。行政がそういう声を聴くチャンネルを持っているかどうか大事。

条例をつくったところで、何かが変わるの?といわれることがある。文化芸術に関わる条例の場合、理念を謳うことが多い。罰則はまず無いし、即事業ができるわけでもない。ただ、大きな意味があると思っているのは、条例についてまず議論をすること。ここにいるみなさんの場合、文化芸術に関する条例がほんとうに必要なのかどうかを議論されてきたということですが、それがまず大事で、文化とか芸術が大事だと自分なりに言えるか。

条例の場合は、それを行政の言葉にしていく。そして、まだまだ自分が言語化していくことが足りないとか、難しいものだと感じると同時に、文化や芸術に関心のない人たちに、なんで文化や芸術が大事なのか、伝えきれていないことに気が付く。そして、伝えきれないままになっていると、文化や芸術は高尚な趣味で、好きな人がやっているものなんだと思われっぱなしになる。

共生という言葉を理解するときに、ユネスコの文化の多様性に関する世界宣言の中に、「文化とは」と定義されている中に、「共生の方法」と書かれている。共に生きる方法が文化のひとつの意味に含まれている。それは、誰もがたった一人で生きているのではないのだから、家族の中でも、地域の中でも文化は生まれ継承されていて、無関係なことではないから大事にしよう。文化がなくても生きていけるとか、一人ひとりが孤立して、誰がどんな暮らしぶりをしようとか、そういう地域になってほしくないと思う。だから、共生していくためには文化がいかに大事か言葉にして、そのために条例があると、市民に向けて議論を投げかけ、私たちの議論が手続きを踏まえた条例になるということは、たいへん重いことであり、前進でもある。そのうえで、条例が実行力のあるものになるために、条例の中に実行の道筋を作っていくことが大事。文化芸術の推進に関する計画の策定や、審議会の設置があり、この条例の理念をどう形にするかというときに、計画を来年などの単年度ではなく、この先5年間どうしていくかという方法を書き込んでおく。理想論だけではなく、理念は理念として謳い、それをどう形にするかを条例にも謳っておく。そして計画に基づいた事業を行い、予算、人、体制をつくり、みなさんの意見をもらうという議論を期待している。

③ 意見交換

実行の道筋を条例に明記して、条例に基づいて計画を立てる、そのために審議会を設置するとおっしゃったが、この点について。（会長）

あえて言うなら、評価や検証を行うなど、ふりかえる内容を盛り込んでいる条例もある。評価はすごくむずかしい。やりすぎると、評価のための評価になってしまうし、査定のようにになってしまうこともある。評価はやればいいってもんでもない。（大澤）

全国を見てこられた中で、条例ができて、ここが変わったとか、良くなったという例があればお話しいただきたい。（会長）

条例ができたことによって、ぱっと変わることはないが、じわじわと変わってきたと見て取れることがある。2年ほど前にできた福岡県の条例は、障がいのある人たちの文化芸術に関することが大きく書かれている。中には、障がい者ということを出して作らなくてもいいのではという意見もあった。社会包摂的には、高齢者、外国人、子ども、性的マイノリティなどがあり、障がい者を区別することにならないかと。それでも、特出しすることによって、県内の各地にホットスポットのように特徴が徐々に出てきている。（大澤）

福岡はすごい勢いがあることについては知っていて、やまなみ工房の作品も早くから取り上げてもらっていた。この甲賀の地域もそのようになればと前から思っていた。（委員）

やまなみ工房は、日本中からだけでなく世界から注目されている。突出した事例がある地域が、その突出したことを謳うこといいのかというと、バランス感覚とかむずかしいところがあると思う。甲賀市の場合、やまなみ工房だけでなく信楽学園とか、障がい者の文化芸術活動が、この市の規模でこれだけ特徴的な活動があるのは、すごいことだと思う。特定の団体のことだから、条例にわざわざ謳わなくてもよいという考え方が、もしかしたらあるのかもしれない。そういう考え方でいくとすると、結局は特徴のない条例になって

しまうのかもしれない。どこに甲賀市の特徴があるのかと言われたときに、特定の事例を避け続けていると、結局意見がなくなってしまうことになるので、活発に意見を出していただくというのではないかと思う。（大澤）

甲賀市らしさという、必ず「忍者」が議論にあがる。前回も、忍者のみではどうも、という意見があれば、まだまだ忍者をアピールできていないという意見もあった。条例の中に甲賀市らしさをどのように載せるのか、アイデアや視点をお話しいただければ。（会長）

外から見て甲賀市はこういうところという視点と、私たちから見て、これはどうしようもなく甲賀市という視点とをバランスよく見せていくのも大事。他所から見てこう見えているということアピールしていくことも大事だが、そればかりだと、そんなんばかりではないと思う人が置き去りにされてしまう。これを大事にしたいとか、こういうところが良いところを掘り出して、見つけ出し、子どもや孫にも教えたいことなどを、どう言葉にできるか。（大澤）

条例や計画は、議論していけばいいものができると思うし、検証と評価もできると思うが、文化の現場サイドでどのように役立っていくのか、事例があればお聞きしたい。（委員）

条例を作ることでどうよくなるのかということは、みなさんがどういうまちにしたいかということと繋がっていると思う。文化的な魅力があるから住みたいとか、住んでてよかつよかつと言える人が増えてほしいと思うし、それがひとつの評価指標なるかもしれない。コンサートや展覧会の入場者数が増えたことも大事かもしれないが、そういうところに行かなくても、人が喜んだり、元気にしてくれていることがあると、それは条例があって良かったということにつながる。ただ、そういうことを考えながら文化芸術活動をしている人はあまりいないと思う。（大澤）

引越してきて25年になるが、ふつうのお年寄りが短歌や俳句をふつうに楽しんでいらっしやって驚いたことがある。東海道の宿場町があった地域ということもあると思うし、条例があることによって、自覚することにつながると思う。（委員）

実は、最近になって短歌や俳句もよいなと思っている。きっかけは福岡であった展覧会で、家庭内暴力の被害にあったひとたちの展覧会で、絵画などの作品だけでなく、俳句や短歌の作品もあり、その力の凄さに驚いた。社会的な問題に気づくが、言葉の表現はすごいと思った。文化芸術は喜びや、楽しみ、生きがい、やすらぎなどポジティブな面もあるが、傷があったり、世の中のネガティブなことも表現としてあり、そういうことも受け入れるのが文化芸術の深みだと思う。まちづくりにおいても、そういう深みが大事で、わたしたちのまちは素晴らしいだけでなく、その中で影になっている生きづらさに光を当てたり、課題を発見したりするのもまだ表現であると思う。そういう意味でも、文化芸術を通じたまちづくりは大事だと思う。いいところばかりではない文化芸術についてもちょっとイメージしてほしいと思う。（大澤）

地元で活動し、若い人に育ててほしいが、演奏の仕事がなかなかないので、結局若い人たちはまちを出ていく。地域に住み活動ができることにつながるよう、条例があればよいと思っている。（委員）

世田谷区の文化芸術の振興に関する条例で、世田谷区さすがだと思ったのは、文化芸術に関する専門的な知識や技能を持つ人の支援について、登用にも触れていたこと。そこまで踏み込んだ表現があって驚いたことがある。支援は大事な側面で、今おっしやった専門性のある人材の活用を促すイメージを持たないと、余暇や趣味の領域にしか行き届かなくなってしまう。人材の育成を書く地域は多いが、育てたあとどうなるのということがあ。育てた後活躍できる場を謳うことは大事。プロ、アマチュア、障がいの有無わけへだ

てなく、すぐれた人材が活躍できることを謳うのは、条例としては踏み込んだものになると思う。（大澤）

生まれも育ちも甲賀市だが、演奏家として活動しているが、地元でいただくお仕事は少ない。若い人たちを育てる仕事もしているが、音大に行ったあと、地元で仕事がなかなかない状況は不安でもある。そのような中、このまちに住んでいこと思うと、そのような一文があるだけでも安心感はある。（大澤）

自分の場合、事業者でバックボーンを市に求めるものではないが、さきほど、検証の話が出たが、計画を立てれば検証が必要なのは当前である。（委員）

これまでの行政は、民間の事業者をどう位置付けるか難しかった。営利、非営利問わずだと思うが、コロナをきっかけに考え方は変わっていくべきだと思っている。営利と非営利の違いは、明確に違うと今まで思っていたが、コロナになってから、非営利にとっても利潤とか利益になる部分が大事に思う。素案に「事業者の役割」があり、今の案はちょっと表現があいまいだと思うが、営利、非営利の事業者が協力して、どのようにすれば、このまち全体が魅力的になっていくかを考えていくきっかけとして大事だと思う。（大澤）

映画館は営利団体ですけれど、利益のためなのではなく、正直なところ利益を出さないと存続できないのでやっている。（委員）

営利、非営利という軸と、公益と私益の軸は同じではない。営利だから全部私の利益を追求するだけではなく、営利だけど公益、パブリックにつながっていることもある。また、非営利と言ってきながら、個人の利益にしかなっていない場合もある。公益を豊かなものにするには、営利非営利がいっしょになって力を合わせていけるのか、議論ができるか。（大澤）

支援という言葉が微妙で、支援というと金銭的な支援とってしまう。支援以外に適切なものはないだろうか。（委員）

条例上で支援とは何かとさらに具体的なことを謳うのは難しい。また、支援は金銭的なものだけでも言えない。かつてから、文化芸術は財政的支援が必要と言いつけてきたが、今は、あらゆることにあてはまることは共通認識しておいたほうがよい。条例の次の団体の計画の中で、支援のメニューで具体化していけばよい。（大澤）

長野県の中野市は小さいまちだが、久石譲が育ったまちで、まちの人に聞いた話だが、世界的に活躍することになった原点は何かと聞いたら、お父さんが学校の先生で、生徒指導の一環で、地域の映画館に出入りしていないか監督していて、久石譲は、そのことにかこつけて映画をたくさん観ていたそうだ。久石譲が育った環境に映画館はあったが、今はない。中野市は文化ホールをリニューアルするそうだが、無くなった映画館がある環境を再生することも考えてよいのではと思う。

どの地域に行っても、むかしはこのまちに映画館があったという話に必ず辿り着く。それくらい、映画館があるかどうかは、その地域の文化資源の目安でもある。（大澤）

子どもたちに対して、また、人口減少に対して、どういった形で文化芸術をアプローチをしていけばよいのか、また、文化芸術に携わる人がこのまちで暮らしていけるようになるには、どのような視点が重要なのか。（会長）

子どもの視点を、文化芸術の条例に入れるのは大事。子どもの権利条例が世界的動きがある。学ぶや遊ぶ、楽しむなど文化的な観点から謳うことが大事。過疎や人口減少を考えると、子育て世代がどのようにそのまちに誇りを持つか。働く場所が近くて、安くて、通勤に便利な場所という理由だけだったら、そこに住み続けたいかという、その子ども

は、同じ理由でここを離れていくことにある。そこにしかない祭りや文化がある。自分はそれが楽しいから活動し続けるとなっていくと離れていくことになる。どこでもよくないものをつくるのが文化。子どもが住み続けたい環境を作るのが文化だというのははずせない。(大澤)

各項目で何かヒントがあれば。(会長)

甲賀市の特色について、外からこう見られたい場合と、内側からわたしが高めたいと思う両方が、前文のところにもっとあってよいと思う。自然のありようや、そこから生まれている文化が書き込めると良い。前文は読む人にどう訴えかけるかだと思う。

専門的な人の活躍が書き込まれているとよいと思う。

市民の権利では、文化芸術を享受する権利を当たり前と思っはいけない。表現の自由が、ともすると自主規制を含め、言いにくくなっている。文化芸術をわたしは関係がないと思っている人は多い中で、これは生まれ持った権利とらえる機会になるとよい。(大澤)

若い人にもわかるようにならないだろうか。条例はむずかしい言葉になるものなのか。(会長)

慣習的としか言いようがない。たとえば、文化芸術という言葉に違和感はあるが、国の法律がそうになっているからそれを踏襲することになるとか。

子どもに向けてどう説明するかは、解説の部分で、子どもにもわかる文を考えてみると、逆に本質が浮かび上がってくるのではないか。(大澤)

閉会

福井副会長 閉会あいさつ